バカと新世界と召喚獣

真上　竜太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと新世界と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ８４５８Ｙ

【作者名】
真上　竜太

【あらすじ】
地球とよばれる世界ともう一つの世界が交わり新たに生まれた世界。
そうしてうまれた新たな世界は【魔力や気】と呼ばれるものが溢れ【魔法と技が】一般化された世界。
世界が変わり価値観も変った世界で天災と呼ばれた少年達が繰り広げるバトルラブコメここに開幕！
「…これバカテスでやる必要あるの？」
「確かに無いが敢えてバカテスで行こうと思う。何故なら」

「何故なら？」
「バカテスが大好きだからだぁ！」
「趣味全開だ！」

プロローグ　ＳＳには色々な始まり方があるけど自称バトルラブコメでこの始

皆さんこんばんは。このＳＳはリハビリのつもりで書いて行きます。一話づつを短く書いて短いサイクルで投稿していこうと思いますのでよろしくお願いします。

では本編をどうぞ。

プロローグ　SSには色々な始まり方があるけど自称バトルラブコメでこの始

「……やっちゃった…」
開幕早々危ない台詞を吐いたのはパッと見美少女に見える美少年だった。
小さな体躯に肩下まで伸された茶色い髪に同色の瞳、顔のパーツは整いどこかネジ一本足りなさそう所も彼の顔に優しさというアクセントを与えて居た。
「昨日打ち上げでロリババァにお酒を飲まされて、皆で僕の部屋に来て、それで…やばい全部覚えてる…」
呟きながら少年はベットの上で頭を抱えた。何故彼が少女では無く少年とわかったのかそれは彼の服装？にあった、彼は上半身は裸で彼の細身の身体には似合わない筋肉が見えて居るからだ。そして…
「お……ちゃ……ん」
「ムニャムニャ…明久さまぁ」
彼の脇から彼に抱き付いて黒い肌に長い黒髪の少女と白い肌に肩口位の長さの金髪の少女が幸せそうにに寝息をたてていた。何故か全裸で。
良く見ると馬鹿みたいな大きさのベットの脇に下着を含めた着衣が四人分散らかっていた。
「ていうか全部あのロリババァのせいだ…僕はまだ手を出す気なんてなか「誰がババァじゃ明久」でたなロリババァ！」
少年、【明久】の台詞の途中で彼の頭に薄い胸板（勿論何も着けていない）を押し付けたのは少女、と言うよりは幼女だ。見た目は八歳前後と言った所だろうか？だがその顔に浮かんでいる笑顔は妖艶そのものだ。
「なぁにが『手を出す気は』じゃ、いずれは抱く気満々じゃったくせに」
そう言って悪戯っぽく笑うと、両手で明久の顔を挟んで後を向か

せると啄む様にキスをする。
「それは、そうだけど…まだ年齢が…」
「昨日も言ったがそんな物些細な事じゃ十になれば酒を飲み、女を抱く。古来よりそれが常識じゃろうが？」
「何年前のどこの国の常識だよ」
ハァっとため息を着きながらも見た目よりもも逞しい腕でくすんだ金髪で何故か狐耳を付けた彼女を抱上げて、前に持って来ると薄い胸板をまさぐる。
「んっ…なんじゃ昨日アレだけやっておいて朝から盛っておるのか？」
「誘って来たのはそっちでしょ。それに僕に女の良さを教えたのは【九妖】じゃんか」
「まぁそうじゃが。やるからには本気で逝くぞ？」
「字が違う気がするけど勿論僕も本気でいくよ？」
「望む所じゃ♪」
言いながら口付けをする為に顔を近付けた。

プロローグ2　世界の事は大事だが本当に大事なのは自分の世界であるｂｙエロ

さて唐突だがベットの上で少々変った運動を始めた二人について詳しく語ろうと思う。

先程名が出た通り少年の名を明久。少女の名を九妖と言う。苗字は二人共有るには有るが彼等にとってたいした意味は無い。人に名乗る時など皆無だし名前で事足りるからだ。

明久の歳は今年で十三、まだまだ成長途中だがその容姿と体格から将来を期待するには十二分だろう。今でも彼を慕う異性は多いが一応男女の関係にあるのは『まだ』片手の指以内だ。

少々若過ぎる気もするが彼の側には今も明久の腕の中で喜声をあげ、明久の『初めて』をすべて奪った少女九妖がおり、その辺の倫理観を綺麗に無視して育て上げた。

曰く「自分を好く女児を喜ばせるの男の当然の義務」「女は好きな男に抱かれる時が一番幸せ」「男たるもの十になれば酒を飲み、女を抱く。それは古来よりの常識」「男と女が一対一等今の政権を握る馬鹿が決めた事、気にする必要は無い」等々ギリギリな台詞を言い聞かせ育てられた為、明久の倫理観は色々崩壊していて細かな疑問を持つにしても概ね先の言葉通りにその辺はゆるゆるである。

そしてその件の幼女九妖も見た目通りの幼女では無い。一言で言えば彼女は世界の化身である。

今から約二百年前元々地球とよばれて居た世界と、異なる世界が『重なった』何故そうなったかは未だに解っていない。

ただその瞬間から世界中の人々は魔力を使った技術即ち『魔法』と気を使った技術『技』を使えて当たり前の物と認識したのだ。だがこの二つについてはまた別の機会に詳しく語ろうと思う。今は九妖の事だ。

彼女は世界が重なった時に生み落とされた世界の化身本人曰く「元々存在していたが、世界が重なった時最も進んだ文化を持ってい

た人としての形を取ったのが今のワシじゃ。見た目は完全に趣味じゃがのぅ」らしい。つまりは彼女は世界そのものである意味世界一のお年よ…げふげふ！おねぇさんである。

暫く変わりゆく世界を楽しんで居た彼女は一人の赤子に出会った、彼女にとって人間等皆同じだと思っていたが彼は『違った』なにがとは言えないが圧倒的にほかとは『違って』いた。

気付けば頬を紅く染め、を膝を折り震えた声でこう宣言していた。

「我世界の化身九妖は未来永劫そなたを愛し！側にいる事を誓う！」

まだ生まれたばかりの赤子に永劫の愛を誓う。今思うと痛い事この上ないしその直後彼の姉と死闘を繰り広げたのも苦い思い出だ。だがそのおかげで彼女は女の喜びを知る事が出来たのだ後悔などある訳が無い。

その後彼等は常に側におり今では同僚兼恋人として今も愛を確かめあっている訳だが、今部屋にいるのは彼等だけでは無い。

「あ、明久さまぁ！？」

「ん…おに…ん…な……で？」

寝起き早々激しい運動（比喩表現）を見せられ叫び声を上げる少女達を見据えながら彼女は今日最初の温もりを体内に感じ女の喜びに打ち震えた。

プロローグ３　まだ三話目なのに早速僕の扱いが酷いんだけど…ｂｙ主人公

少女達が目を覚ましてから少しの時間がたった。九妖は胡座をかいている明久の膝を陣取り、胸板に頭を預けながら少女二人に視線を送る。即ち『羨ましいじゃろぅ。ん？』と、その瞬間だった。

ドン！ドン！

ズッガシャア！

キンッ！

凄まじい轟音と銃声が二つ、続いて先の音より高い音が一つ。そして何喰わぬ顔の九妖と怒り、いや嫉妬爆発！という少女二人とその形相にガクブルの明久が必死に視線を逸らしていた。

「明久様から離れろ雌ぎつね！」

声を張り上げるの金髪で色白の美少女。先程は閉じられていたスカイブルーの瞳に嫉妬を、空間転移とよばれる魔法により手元に手繰り寄せた彼女の瞳と同じ空色の二丁拳銃に殺意を乗せ、銃口を彼女が居るくせに自分に手を出した明久…では無く九妖に突き付ける。その時包み隠す物が無いせいでプルンと震えた核弾頭（比喩表現）に明久が身を乗り出したのはしょうがない事だろう。

「ぶ……こ……す！」

静かに殺意と嫉妬の炎を燃やすのは黒い肌、黒い髪、おまけに黒い瞳の美少女だ。

彼女はスラッと背が高く他の二人に比べ手も足も長い。恐らく身長も明久より高いだろう。その長身でもって『１００ｔ』と書かれたハンマーを担ぐ全裸姿をガン見した明久に罪は無いだろう。

「やれやれ、そう吠える事でも無かろう、『アリス』も『シュラ』も何を今さら」

「今さらじゃありません！昨日私は明久様にあ、愛を注いで頂きました！これで貴女と対等です！」

「シュ…ラ…もた…とう！」

双銃を構え吠える白い美少女アリスとハンマーを片手で振り回す褐色の美少女シュラ、言い方は違えど自分達は対等だと語る。と言う事は…

「二人共昨日の事…」

明久は昨日の九妖にしこたま酒を飲まされ二人が居るベットに放り込まれ、そのまま『やっちゃった』のだが…

「しっかり覚えてます。と言うか発案は私です」

「ぜっ…た…わすれ…ない」　衝撃の事実をサラッと言われて頭を抱える明久、いやそれだけ彼女達は自分を想っていてくれるている思えば！

「明久様なら必ず私達を抱いて下さると思っていました」

「お…にちゃ…んは…けだ…もの…だから」

彼女達の評価に明久は心が根元から折れそうだった。「そうか僕はそんな評価なのか…」と虚ろな目で呟いている。

「計画に協力すれば正妻はワシに譲る。そう言う契約だったはずじゃが？」

そんな明久の頭をよしよし、と撫でながら九妖は二人に言葉を返す。明久の「え、それ初耳なんだけど」と言う言葉は綺麗に無視だ。

「それとこれとは話が別です！」

「シュ…ラ達も…くっ…つく」

そう言って引付こうと明久に三十ｃｍ迫った時

ガン！

「いたっ！」「い…たい」

良い音と共に何かにぶつかった二人。パッとみそこには何もないが明らかにアリス達は何かにぶつかった。よく見れば先程の銃弾が中空で制止するように何かに食込んでいる。

「この！雌ぎつね結界とは卑怯です」

「ず…るい！」

そう見えない壁のような物それは結界とよばれる術だ。他者が入込めない空間を作り隔離したり、目の前に結界を形成し盾にしたり

できる応用性の高いが複雑な術式が必要な為扱いが難しい高難度の術式だ。
それを片手間にやる九妖の実力はおおしてしるべし。だが才能の無駄遣いなのは気のせいだろうか？
「ふん悔しければ破ってみるのじゃな。もっともまだまだ乳臭い小娘には無理じゃろうがな」
余裕と嫌味をたっぷり乗せて放たれた言葉の刺。それを受けた二人は…
「良いでしょう、そんなに言うなら結界毎吹き飛ばして上げます！」
「ぶっ…ぶす！」
見事にブチぎれた。明久の「ちょっアリス！それだと僕も一緒に吹き飛ぶんだけど！？」と言う言葉はやはり綺麗に無視だ。
「我放つは光の軌跡！魔を打ち払い聖を焼く破壊の軌跡！森羅万象砕く一閃！その身で受けろ！」
「闇よ…集え！…集え！…集え！」
アリスの言葉共に銃口に眩いばかりの光が、シュラの言葉と共にハンマーに唯唯暗い闇が集う。
魔技とよばれる魔力と気を融合して放つ高等技だ。その威力は使う者が使えば街をも吹き飛ばせる一撃だ。
その高等技をただの嫉妬で解き放つ。こちらも正に才能の無駄遣いである。
「良かろう来い小娘共！」
「ちょっ二人共ここホテルだよ！？」
そんな明久の叫びはやっぱり綺麗に無視だ。彼女達の耳には何かフィルターでもかかっているんだろうか？
「輝け！シャインカタストロフ！【光の破滅】」
「堕ちろ！…ダーク…カタス…トロフ！【闇の破滅】」
『共鳴技【リンクアーツ】！カオスカタストロフ！【混沌なる破滅】』
言葉共に放たれた一撃は混ざり合い、解け合い、透明な力の塊に

なり明久と九妖毎結界を飲み込んだ。

プロローグ４　そして更に扱いの悪いオリキャラってどうよ？ｂｙ銀髪少年

結界は無色透明の波動に飲み込まれたがホテルの部屋には一切被害が無かった、何故なら…

「ったく。二人共ちょっとやり過ぎだよ」

その破壊のエネルギーはすべて明久の手の中に収まっていた。下手をしたらこのホテルどころか街を数個灰に出来る程のエネルギーが、だ。

彼は【カオスカタストロフ】が結界を破った瞬間そのエネルギーを圧縮し、その手の平に収束したのだ。

もし彼の事を知らない人間が見れば有り得ない、と目の前の光景を否定するか、頬を思い切り抓るだろう。それぐらい現実ばなれした光景だった。

「あ、えっと…ゴメンなさい」

「ごめ…ん…なさい」

明久に軽く睨まれ目に見えて落ち込む二人。冷静になった頭で考え、まわりに迷惑をかけたと理解しうなだれた。

「……ふぅ。でも、まぁ」

暫く間を置いてから明久を二人を片手づつで二人同時に抱き締めた。因みに九妖は未だに明久の膝の上な為明久の腕の中に美少女が三人おさまる形である。……もげれば良いのに。

「九妖の安い挑発に簡単にのる程僕に触りたいって思ってくれたのは、素直に嬉しいかな」

言葉を発する間に彼女達の頭に手をやり優しく撫でる。

そんな事をされた二人は「ふにゃあ」とか「ん…もっと」とか言いながら幸せそうに惚けている。

「ぬぅ、明久。二人だけずるいのじゃ。ワシも撫でてくれ」

「だまらっしゃい」

明久は九妖の可愛らしい願いを軽く切り捨ててこちらも軽く睨ん

だ。
「元はと言えば九妖が悪いんだから少しは反省する事」
「ぬっしかしじゃな…その…」
「その、なに？」
九妖は暫く言い淀み意を決して顔をあげると軽く涙目になりながら、告げた。
「ワシとて女じゃ幾ら仕掛けたのがワシとはいえ、その…好きな男に他の女が触れるのはあまり良い気はせぬのじゃ。許してたもぅ」
なら最初からしなければ良いのにとも思うが、九妖は二人の気持ちがいたい程理解出来た。目の前に居る男は人としても、男としてもこれ以上無い程魅力てきだ。
そんな彼のすぐ近くにいて惚れるなと言う方が無理な話だ。ましてや彼女達は彼に人生を救われて居るのだ。
だから女として、二人の友して協力しない訳にはいかなったのだ。傲慢な態度から誤解されがちだが彼女は友人思いの優しい女性だった。勿論明久はそれをわかっている。だから彼女の言葉は明久の胸を貫き…
「っ！許すに決ってるじゃん！ちくしょー！」
思い切り三人纏めて抱き締めた。三人のそれぞれ違う女性特有の匂いと、柔らかい身体を堪能しながら悦に浸る。端から見れば変態そのものだが女性三人も目を蕩けさせ、もっとと彼の身体に身体を寄せているからおあいこだろう。
「でも三人共本当に良いの？その、三人同時に…なんて」
少し苦い顔をして言う明久に対して満面の笑みを浮べた三人は頷いた。
「何を今更、明久の女になった時点で覚悟しておったわ」
「私には貴方以外なんて有り得ません。たとえ貴方に嫌われたとしても貴方の側にいます」
「おにぃ…ちゃ…だけ」
言ってさらにくっつく三人。その三人を力強く抱き締め明久は

「ありがとう皆！僕精一杯頑張るよ！」
などと倫理敵にどうよ？な言葉を叫ぶがそれを感じ無い様に育てた張本人はその腕の中で幸せそうに惚けているので彼女の『計画通り！』と言った所だろうか？
そして少し距離を離し口付けを交わそうとした。…が。
ガチャ
「おーい明久さっきの魔力の急上昇はいったいなん…」
空気を全く読まず部屋の扉を開けて入って来た銀髪の少年は、同僚三人がほぼ裸で抱き合って居る部屋の光景を見て硬直し…
パキーン
オレンジ色の結界に閉じ込められた…
「ちょっ明久！話せばわかる。話せばぁ！」
「……遺言はそれだけ？」
先程三人でイチャついていたとは思えないやけに低い声色で呟き【カオスカタストロフ】のエネルギーを更に圧縮して指先に集中する。
「まて！これは事故だ！偶然だ！事件だ！」
「いや最後のは違うじゃろ」
と言う九妖の突っ込みをバックに明久は…
「……消えちゃえ」
「イヤー！」
全エネルギーを結界内に開放した。

プロローグ5　キャラが男二人だけの上にほぼ説明オンリーっとは…どうかと思う

あの後銀髪の少年を『どうしようも無いゴミ』と書かれたゴミ箱に投入れ（ゲートとよばれる空間転移装置で近所のごみ処理場直通）もう昼御飯時なのでホテルの食堂で食事をとると言う事になり、先に服を着た明久は部屋の前で彼女達を待って居た。

「……ふぅ」

明久は壁に背を預け缶コーヒー片手にハンディサイズの機械をいじっていた。

明久の格好はワイシャツにズボンと言うラフな格好だが非常に絵になっている。

「『溜め息をつくと幸運が逃げる』確か日本の伝承だったと思いますが？」

「幸せから出る溜め息はノーカンって僕は思ってるけど？」

そんな明久に声を掛ける少年がいる。開いてるかどうか分らない糸目に短くも長くも無い黒髪、歳の頃と体型は明久と変らない少年だ。その顔には明久とよく似た笑顔がうかんでいる。

彼は明久の向かいの壁（と言っても一流と呼ばれるホテルなので廊下が広くかなり距離がある）に背を預けると同じ様に缶コーヒーを口にした。

「昨夜はありがとう御座いました」

明久と同じワイシャツとズボンの少年は軽く頭を下げながら礼を述べた。

「昨夜って言うと昨日のアレ？お礼を言われる事じゃ無いよ。あの技術が実用化されれば僕達【アーク】の仕事が楽になる事は解り切ってる。なら協力するのは当然でしょ」

「それでもアークの賛同を受けた事でこの業界では新参者の僕達【文月】の技術が注目をうけたのは確かですから」

彼等の会話を補足すると昨日は三週間に渡り続いた【最先端技術

考察会】つまり一流と呼ばれる組織のトップが集まりその技術をお披露目し、評価すると言う会議の最終日だったのだ。
その会議の最終日に行われた【総合魔機具製造会社文月】が行ったプレゼンテーションに対して最も速く、強い関心をよせたのが【全世界魔気事件対策機構】通称アークである。
二百年前の世界融合の際に出現した魔力と気が溢れそれが魔法と技を生み出した。
それにより人々の生活は少しずつであるが変っていた、先のゲートの技術もそうだが魔法と機械を融合し生み出された【魔機具】とよばれる技術等により世界は様変わりをしていた。
だがそれに伴いその力を悪用し私利私欲を満たす犯罪者が増えたのも当然の流れだろう。それに対抗する為に造られた機関が【全世界魔気事件対策機構　アーク】解りやすく言うと魔気犯罪専門の国際警察である。
アークは誕生した時よりその役割によって世界に対して多大な影響力と、力を持っていた。だがアークを今の世界のトップに名を連ねる組織にしたのは他でもない…
「感謝してるならお昼御飯奢ってくれない？今からなんだよね」
現在のアークの若きトップである彼、吉井明久の力が大きい。いや彼の力あってこそと言って言い。彼は頭の回転こそ悪いが人を見る目は本物だった。
彼は正確に人の才能を見抜き、最もてきした場所と時に最も適した人材を配置した。たったそれだけ、だがそれだけでアークは世界は変った。
僅か六年で世界の主だった犯罪組織は潰れ、アークとそれを束ねる少年吉井明久率いる【五芒星（ペンタゴン）】が抑止力となり世界の犯罪は減り続けている。
「ならばこの近郊の僕の別荘に来ませんか？勿論他の皆様もご一緒に」
そして彼が最も信頼する魔機具メーカー【文月】を纏める若き才

が彼『藤堂文斗（とうどうひみと）』明久と同じ歳である彼も短い間に文月を一流企業の座を不動の物にし、今回新しく犯罪抑止に繋がる数々の技術を発表した。
「いきなりだけど良いの？」「勿論です。使用人達もペンタゴンが来るとなると喜んでくれる筈です。是非」
「分った。じゃあ彼女達が来たら行かせて貰うね。場所マーキングしてるから問題ないし」
「わかりました。ではお待ちしています」
そう言って彼は相変わらずの笑顔で去っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8458y/

バカと新世界と召喚獣

2011年11月29日23時55分発行